

with
CHRIST
in the
SCHOOL OF PRAYER

by

Andrew Murray

あなたは祈りたいと願ひ、祈りの必要を感じています。あなたは、
感覚を越えたところに神秘の世界があり、それは効果的な祈りの秘訣
を見出した者たちに開かれていることを知っています。

アンドリュー・マーレーは、その秘訣を知っていました。彼はこの
本の中で、進んで価を払おうとする人々にその秘訣を明らかにしてく
れるでしょう。

目次

私はアンドリュー・マーレーに会った

はじめに

第一課 主よ、私たちに祈りを教えてください——唯一の教師 14

第二課 霊とまことによつて——真の礼拝者 23

第三課 隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい——神と二人だけに

第四課 こう祈りなさい——模範的な祈り 40

第五課 求めなさい。そうすれば与えられます——祈りの答の確かさ 49

第六課 なおのこと——神の無限の父としての心 57

第七課 なおのこと、聖霊を下さらないことが——いっさいを含む賜物 67

第八課 あくまで頼み続けるなら——神の友の大胆さ 75

第九課 収獲の主に祈りなさい——祈りは働き手を起す 84

第十課 わたしに何をしてほしいのか——祈りは明確でなければならない 92

第十一課 すでに受けたと信じなさい——約束のものをいただく信仰 100

第十二課 神を信じなさい——信仰の祈りの秘訣 109

第十三課 祈りと断食——不信仰のいやし 118

第十四課 立つて祈るとき、赦してやりなさい——祈りと愛 128

第十五課 もし、ふたりが心を合せるなら——集団の祈りの力 136

第十六課 いつまでも放っておかず、すみやかに——勝ち抜く祈りの力 144

第十七課 あなたがいつもわたしの願いを聞いて 155

くださることを知っております——神であることと祈りとの調和

第十八課 だれの肖像ですか——人間の運命に調和する祈り 163

第十九課 わたしは父のみもとに行く——祈りとみわざの力 171

第二十課 父が栄光をお受けになるためです——祈りの主目標 180

第二十一課 あなたがたがわたしにとどまるなら——包括的条件 190

第二十二課 わたしのことばがあなたがたにとどまるなら——みことばと祈り

第二十三課 求めるものを御父が与えてくだ 201

さるために、実を結びなさい——力ある祈りへの道である従順 210

第二十四課	わたしの名によつて——勝利ある祈り	219
第二十五課	その日に——聖霊と祈り	229
第二十六課	わたしは、あなたのために祈りました——仲保者キリスト	238
第二十七課	父よ。お願いします——大祭司キリスト	250
第二十八課	父よ。わたしの願うことではなく——犠牲としてのキリスト	259
第二十九課	神のみこころにかなう願いをするなら——祈りにおける大胆さ	268
第三十課	聖なる祭司——とりなしのみわざ	279
第三十一課	絶えず祈りなさい——祈りの生活	288

付 録

私はアンドリュー・マーレーに会った

私は南アフリカで宣教師として奉仕をしていた時に、ケープ・プロビンス（南アフリカ共和国のケープ・オブ・グッド・ホープの旧称）のケールドンで開かれたキリスト者学生運動の年会に出席しました。主講師は、八十四歳になるアンドリュー・マーレーでした。彼が、町の中央広場に面したオランダ改革派教会の大会堂で、息をこらして彼のことばを聞く聴衆に預言者の迫力をもって測り知れないキリストの富を説教した時（四十五キロにも満たないきゃしゃな体格にもかかわらず）、その響き渡る声は会堂にみなぎりしました。

大会に出席していた教職者たちは、ある朝、教会の牧師館でアンドリュー・マーレー博士とお会いするよう招待を受けました。一行がうやうやしく静かに部屋に入ると、小さな霊の巨人が待っていました。博士は、両手をひざの上に組んで座っていました。輝いた顔は、私たち全員に対する優しい微笑をたたえ、博士は冒しがたいほどの思慮深い雰囲気に含まれていました。その朝、私たちにしてくださいましたすばらしいお話も、今はもうはつきりとは思いませんが、ただ一つだけ鮮やかに覚えていることがあります。

全員が顔をそろえると、マーレー博士は静かにこう言いました。「祈りましょう。」その祈りの祝福が今も残っています。お会いする前から、私たちは皆博士が世界的に有名な信仰書の著者であり、南アフリカで最も愛されている説教者であることを知っていましたが、あの祈りの後、私たちは、自分たちが神の人の前にいることをはっきりと知ったのです。

ウォルター・バロー

はじめに

「わたしにとどまりなさい」という命令に続くあらゆる約束の中で、「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」という約束ほど気高いものはありません。それはまた、すぐに次のような告白をもたらします。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」神の力こそ、主のうちに完全にとどまる人生の最高の到達点です。

「キリストにならう生き方」の数ある特徴の中で、御父の御前で絶えず忍耐をもってとりなしておられるキリストにならうことほど、気高く、栄光に満ちたものではありません。キリストのうちにとどまればとどまるほど、またキリストに似れば似るほど、キリストの祭司的な生き方が私たちのうちに力強く作用し、私たちの生き方は、常に人々のために願いをささげ忍耐をもって祈り続けておられるキリストの生き方となるのです。

「私たちを王とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である」（黙示一・六

欄外注。王の場合も祭司の場合も、力と影響力と祝福がその中心的な事柄です。王の力は上から下へくだる力。祭司の力は上へのぼる力、忍耐をもって祈り続ける力です。イエス・キリストは恵み深い祭司であり王です。イエス・キリストの王としての力は、祭司としての「キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持つておられます」という事実にもとづいたものです。キリストの祭司であり、王である私たちの場合も同じです。すなわち、とりなしによって、教会はその最高の力を得、各教会員が、神と人との争いで勝ち得たあのイスラエルの子孫であることを、それぞれ証明すべきです。

私はキリスト者の生活において、祈りの位置と力があまりにも理解されていないのを悲しく思い、この本を書くという気持ちになりました。祈りを、おもに自分自身のキリスト者としての生活維持の手段として見ている限り、祈りの本分を完全に知ることにはできない、と私は確信します。しかし、もし祈りを、あらゆる働きの根本であり力である最高の務めと見ることを身につけるならば、私たちにとって、正しく祈る技術を学び実行することほど必要なものは他にないことが分るでしょう。また、もしも私が、祈りに関する主の進歩的な教えと最後の夜の驚くべき約束（ヨハネ一六・一六）が、主の御名によって私たちのなすべきみわざや、更に大いなるみわざや、多くの実を結ぶことなどにはつきり言及していることを指摘できたとしたら、私たちが教会にキリストの力を期待できるのは、教会がこの聖なるとりなしの祈りのみわざに専念する時だけしかな

いことを、だれもが認めるでしょう。私の祈りは、神がその子供たちによって用いられることを望み、また疲れ果てたこの世も待ち望んでいる、その力と感化力との驚くべき位置を、神の子たちに明白に示すためにこの小さな本が用いられることです。

祈りに関するイエスの教えを学ぶうちに、それと関連したもう一つの教えが、非常に明確に示されました。それは次のようなことです。御父は、私たちが望むもの、イエスの御名によって求めるものを私たちに与えるために、あらゆる信仰の祈りを聞こうと待っておられるということです。私たちは、神のすばらしい愛と大いなる約束とを制限することに慣れてしまっていて、主の最も単純な、明確なみことばを読む時でさえ、これを加減する聖句を用い、あるいは警戒し、あるいは何らかの解釈を加えなければ読むことができなくなっているのです。もし教会が学ばなければならぬことがあるとすれば、それは、まず祈りが答えられるのは神のみことであるということです。次に祈りが答えられるということを信じて自らをささげる神の子供に対し、神がどのようなことをなしてくださるかについて、全く考えられていなかったということです。神は、祈りを聞かれる、ということは、だれもが認める真理です。しかし、その意味を理解し、その力を経験している者はほとんどいないのです。私の書いたことが読者を奮い立たせて主のみもとに行かせ、主のすばらしいみことばを単純に、文字通り受け止めるようになるとすれば、それで私の目的は達せられたこととなります。

そこで、もう一言申し上げたいと思います。この末の時代において、多くの人々は、いかにキリストが完全に私たちのいのちとなり、また私たちが必要としているものをすべて私たちのうちになそうとして、それを御自身に引き受けられるかを学ぶことによって、ことばに言い表すことまのできない祝福を見出してきました。私たちがこの真理を、自分の祈りの生活に適用することまでも身につけたかどうかは、私には分かりません。多くの人々は、自分には信仰によって祈り、多くの効果ある祈りをする力がない、とつぶやいています。私はそのような人たちに、恵み深いイエスはあなたに次のことを教えようと待っておいでになるということを申し上げたいと思います。キリストこそ私たちのいのちです。キリストは天において、常に祈るために生きておられます。もし私たちが心から主に信頼するならば、私たちのうちにいます主のいのちは、常に祈るいのちとなるのです。キリストは、模範や教えや命令や約束だけで、私たちに祈りを教えられたものではありません。キリストは私たちのいのちとして、いつまでも生きておられる、とりなしの祈り手として御自身を現してくださいなのです。このことを信じ、自分の祈りの生活のためにもみもとに行つて主のうちにとどまる時に、正しく祈れないという私たちの恐れは消えうせてしまします。そして、喜んで主に信頼し、主御自身が私たちの祈りのいのち、力となって、私たちに祈ることを教えてくださいと願うようになるのです。

どうか、神が私たちの目を開き、とりなしの祈りがどんなに聖なる務めであるかを教えてください

はじめに

さいますように。私たちはこの務めに、神の王たる祭司として召されているのです。どうか神が私たちに、自分の祈りがどんなに力強い影響を及ぼすことができるかを信じる強い大きな心を与えてくださいますように。常に祈るために生き、私たちのうちに祈るために生き、また私たちの祈りの生活に対する保証となっておられるイエスを見上げる時に、果して務めを全うすることができるかとの恐れを、すべて取り除かれますように。

アンドリュー・マーレー